自然への礼節を持つ

「アロマスプレー」と「つみ木」。
どちらもオイスカが国内で取り組む
森づくり活動から生まれた森の恵みです。
そうした活動に専門家として携わる
村上志緒さん、川合亜希子さんは、
自然を敬い、自然にお返しをする
「作法」があり、「礼節」を持つことが
大事だと説きます。
言葉で説明することが難しい
“人の心の世界” につながる
さまざまな事象や、人が取り戻すべき
自然への「礼節」について語ります。

| 特集 |

新春鼎談

村上 志緒
株式会社トトラボ　代表

川合 亜希子
株式会社Verita　代表取締役

中野 悦子
公益財団法人オイスカ　理事長

左から川合氏、中野、村上氏

What's OISCA

オイスカ・インターナショナルは、「すべての人々がさまざまな違いを乗り越えて共存し、地球上のあらゆる生命の基盤を守り育てようとする世界」を目指して1961年に創立された国際NGOです。現在、41の国と地域にネットワークを持って活動しています。

公益財団法人オイスカは、1969年にオイスカ・インターナショナルの基本理念を具体的な活動によって推進する機関として生まれ、主にアジア・太平洋地域で農村開発や環境保全活動を展開。特に人材育成に力を入れ、オイスカの研修を修了した現地の青年は、各地で地域開発に取り組んでいます。国内では、農林業体験やセミナー開催などを通して啓発活動を積極的に進めています。

OISCAという名称の意味

- **O**rganization　機構
- **I**ndustrial　産業
- **S**piritual　精神
- **C**ultural　文化
- **A**dvancement　促進

人間の生存に不可欠な“産業・精神・文化”のバランスを大事にした発展を世界規模で推進していくことを目的として、このように名付けられました。

中野　今日はお忙しい中お集まりいただき、ありがとうございます。また、日頃からオイスカの活動に、専門分野を活かしてさまざまなご協力をいただいておりますこと、あらためて御礼申し上げます。村上さんはハーブがご専門で、「富士山の森づくり」などの現場に育つ樹木や植物を活用したアロマスプレーづくりをはじめとする取り組みを、川合さんには木育活動へのアドバイスをいただくなど、主に国内の森づくりのフィールドでご活躍いただいていますが、今日は森づくりに限定せず、いろいろなお話をおうかがいできるのを楽しみにしています。

始めに、自己紹介もかねて最近の活動についてお話しいただけますか。

村上　私はトトラボという会社を立ち上げて、民俗薬草文化などを研究しながら、人と自然とのつながりから生まれる植物療法について、学び、広めていくための取り組みをしています。オイスカさんとの関わりは、「富士山の森づくり」の現場で、森の植物を活かしたバームやアロマスプレーづくりをしたのが最初で、現在は、ほかのプロジェクトの現場でも木だけではなく、森の下層植生の香りや効能に焦点を当てて、私たちの生活に活かす活動を進めています。各プロジェクトでは、木を植えて育てるフェーズから、その森を守りながら恵みを活かす発展的な取り組みを模索していて、その中で生まれたものです。

中野　コロナ禍ではアロマスプレーを医療従事者に届ける活動もしていただきましたね。

村上　はい。シラベの葉がこのような形で活用できるとは思ってもいませんでした。オイスカ山梨県支部（以下、県支部）が事務局を務めているやまなし水源地ブランド推進協議会※で、製品化しています。最近では、昨年9月に山梨県の早川町がホストとなって開催された全国ハーブサミットで、県支部と共に実行委員のメンバーとして関わらせてもらい、杉の葉の蒸留体験のワークショップを担当しました。地元の早川町や山梨県内の方だけでなく、全国からハーブに関心をお持ちの大勢の方が足を運んでくださり、辻一幸

※9ページにて紹介

町長も「早川町にこんなに人が集まるのは初めてのことではないか」と喜んでいらっしゃいました。また、11月にはインドネシアで「子供の森」計画（以下、CFP）に参加している子どもたちの代表が親善大使として来日した折に、早川町を訪問し、蒸溜体験などを通してハーブについて学んでもらうことができました。

中野　村上さんは早川町にお住まいなんですか？

村上　いえ、今は神奈川県に住んでいます。ただ、出身は山梨県で、県支部の以前の事務所は、私の実家のすぐそばにあったんですよ（笑）。町長のご厚意もあり、古民家を活用させてもらって県支部の田中美津江さんと一緒に、みずともりプロジェクト「トトラボみずともり研究所」を早川町に構えて活動しています。

中野　子どもたちも喜んだでしょうね。CFPでは植林だけではなく、ハーブの栽培などをしている学校もありますから、さらなる活動の広がりも期待できます。

村上　インドネシアのCFP活動ではハーブ園を設置している学校もあるそうですが、薬や食品としての活用はしても、香りを楽しむことはないそうで、今回は特別な器具がなくても蒸溜できる方法を一緒にトライしました。

中野　CFPは、森を育て、自然に触れる活動を通して子どもたちが自然を愛し、守っていく心や行動する力を養う活動ですが、川合さんも木育を通じて子どもたちの育成に取り組んでくださっています。その活動から感じることや最近の取り組みについて教えていただけますか。

上／古民家を活用した「トトラボみずともり研究所」。玄関に置かれた看板

下／町の面積の96%が森林という早川町の山あいに研究所がある

川合　私は、保育園のマネジメントや一般企業などでの研修をはじめとしたコンサルティングの仕事をしています。教育活動にも長く携わっていて、現在、オイスカの「木育プロジェクト」に総合プロデューサーとして関わっています。最初にオイスカの山梨県支部に出向いた際は、木のおもちゃをご紹介いただけるということで、オンラインの打ち合わせではなく、直接木の香りに触れたくて遠方から足を運ばせてもらいました。県支部の田中さんから、オイスカの理念や目指すものについてお話をうかがい、魂が震えるような感動を覚えました。「木育ひろば」は、日本の森の木で作られたつみ木を使って子どもたちが遊ぶものですが、日本人が本来持っている精神力の強さや感性などを呼び覚ましてくれる素晴らしい活動だと感じています。今の子どもたちはいろいろな種類のおもちゃを与えられ過ぎていて、遊びに関しても受動的になっていると思います。おもちゃに遊ばされているといった感じでしょうか。本来内面の奥底にあるはずの意識が外に存在しているような感覚の子どもたちが増えていて、彼らは自分から何かをしたいという意識を持てずにいるよ

村上　志緒（むらかみ　しお）

株式会社トトラボ　代表／薬学博士

複数の企業勤務を経て、トトラボの前身となる「トトラボ植物療法の学校」を2009年に設立し、同年からフィジーをフィールドにした研究もスタート。15年、株式会社トトラボを設立。
研究活動の傍ら、セミナーやワークショップを開き、人と自然とのつながりから生まれる植物療法について、自然・生活文化・科学の観点から学ぶ場を提供している。

㈱トトラボ　https://www.totolab-shop.com/

1：「富士山の森づくり」の勉強会で講師を務める。参加者は、シラベの葉を活用したアロマスプレーづくりを体験

2：早川町で開催されたハーブサミットのパネルディスカッションでは、ファシリテーターを務めた

本来日本人が持っている精神力の強さや感性を呼び覚ましてくれる

川合　亜希子（かわい　あきこ）
株式会社Verita　代表取締役
25年間、乳幼児教育に携わり、2016年に 教育事業会社Veritaを設立。選択理論心理士、保育士、幼稚園教諭、スクールカウンセラーなどの資格を持ち、教育の現場における職員研修や講演会のほか、保育園コンサルティング、子育て講座をはじめ、企業を対象にした研修での講師を務めるなど幅広く教育活動を行っている。
㈱Verita　https://verita-a.com

1：木育ひろばで使う木のおもちゃは、国産材を活用し、丁寧に作られている

2：木育は子どもたちの感性が育まれるだけではなく、大人もさまざまな気付きを得られる

うに感じます。でも、そういう子どもたちが、目立つ色や刺激の少ない本物の木のおもちゃに出会い、自分自身からおもちゃに関わることで、遊びこみ、自分と向き合うことができるんです。感性や非認知能力というか、何か数値化できない能力のようなものが呼び起こされているような気がしています。先日、初めてろう学校で「木育ひろば」を開催した時、つみ木を積み上げて、作品を壊してはまた積み上げてを繰り返しながら、つみ木と向き合っているお子さんがいました。先生のお話では、普段は集中できずに外に出て行ってしまう児童とのことでしたが、たった2時間のつみ木遊びで集中力や自己コントロール力を発揮する本来の姿が引き出され、木育の素晴らしさを再認識しました。

中野　私も「森のつみ木広場」に行ったことがありますが、つみ木遊びは、大人も夢中になってしまいますね。お父さんお母さんが子どもをほったらかしにして遊んでいる光景も目にしました（笑）。親子で一緒に遊べるのは素晴らしいことだと思いますし、活動時はスマートフォンを持ち込ませないことによって、そうした結果が得られるのだと、後でスタッフから聞きました。子どもが一緒に遊んでほしくても、親はスマートフォンをいじっているといった状況が日常にはありますから……。

川合　親子一緒に参加してもらう活動では、形が数種類しかないつみ木で、創造性をスパークさせて夢中で遊ぶ子どもたちの姿を親御さんたちに見てもらい、子どもの持つ可能性や彼らの成長を感じてほしいと思っています。大人も子どもも育てるのが木育です。特にオイスカの木育活動には、その奥にオイスカの精神がしっかり入っているのがポイントです。いろいろなところで木育が流行っていますが、オイスカの取り組みは、長い歴史の中で、世界で「実」を作って来られた根底にある理念が伝わる、唯一無二のものだと感じながら活動に携わっています。

中野　ありがとうございます。お二人には主に国内での取り組みに携わっていただいておりますが、八百屋のごとくあるオイスカのさまざまな活動の多くは海外で展開していて、中でも特にアピールしたいと最近思っているのは、タイのチェンライでの活動です。はげ山になってしまっていたところに1980年代以降、日本からも多くのボランティアの人たちが行き、地域の人たちと一緒に森の再生に取り組んできた場所です。昨年現場に足を運んだ本部のスタッフから聞いた話ですが、活動当初は、村のため池の水が枯れていたのですが、今は森が育ってきて保水効果が高まり、養魚ができるまでに水が戻ったそうです。森が再生したことで、林床で山菜が採れ、はちみつも採取でき、地域の人たちが笑顔で生き生きと過ごしていて、村に活気も戻ったというんです。まさに植林の効果ですよね。森林の働きが人々の生活を豊かにしている好事例の報告を受け、オイスカがアジアの各地でこうした取り組みをしていることの意

義をあらためて感じました。

また、オイスカでは50年以上にわたり、アジア太平洋地域の青年たちを対象にした農業の研修もしていますが、経済発展が著しい国では農業にあまり目が向けられなくなってしまい、研修の継続が難しい面も出てきています。でもオイスカは土と共にこれまで歩んできました。土が劣化したら人間も生きていけなくなると分かっているからこそ、微生物と共に命を育む活動を続けています。各国で研修を受けた青年たちを日本に招聘し、1年程度の研修を行っていますが、研修センターでは合宿スタイルで寝食を共にしています。研修を終え、彼らが帰る時、肌の色や宗教に関係なく、自分たちは兄弟、家族だと言って別れを惜しんで涙を流して抱き合うんです。その光景を見ると素晴らしいなぁと感じます。オイスカの創立者が「人類大家族」と言っていましたが、各センターで一緒に研修をした彼らのこういう姿がまさに「人類大家族」を表していると思います。宗教の違いなどで、この地球上には未だ争いもあるのが実情です。でも人類はそれを乗り越えられると、研修生の姿を見て私は確信しています。この「人類大家族」の精神を広げていきたいと思って活動を続けています。

川合　オイスカの創立者が掲げておられた理念に触れるたびに、私の目指す生きざまそのものだと感じます。私自身のお話をすると、母はクリスチャンですが、祖母が京都の平安京の守り神と言われていた神社に奉仕をしていて、小さい頃から神社になじみがありました。でも、家自体はなぜか仏教なんです。日本では、こんなふうに一つの家庭の中にもたくさんの宗教が存在しています。また、高野山の麓には、丹生都比売（にうつひめ）神社があって、空海は仏教の一つの宗派である真言宗の開祖でもありながら、仏教の修行の前に、まずは神様へ感謝し、「おかげさまで」の気持ちを持つことを説いていたそうです。ユネスコも、宗教を融合させるというのは世界にはないことだと、そのユニークさに注目しているそうですが、私もそこにこそ「調和」という世界平和に必要なものがあると思っています。私は宗教の原点は宇宙にあると思っていて、仕事でも中心においている選択理論心理学もそうですが、原点やあり方が同じなんです。SDGsが広まるのも大事ですが、利益を優先するような組織では、目的が逆転してしまうこともあります。でも、オイスカの木育活動を通して感じてきたのは、優先順位が利益やお金ではなくて、自然界への礼節をただ純粋に願い、行動するあり方です。オイスカの存在や活動、「人類大家族」などの考え方はもちろんですが、それを現実のものにしようとする「あり方」そのものを教育として伝えていくことが大事なのかなぁと思います。私が携わっている木育も、簡単に言ってしまえば「木で遊ぶ」ことなのですが、その奥底にある大切なものを伝えながら、オイスカさんと一緒に人づくりに取り組んでいきたいと思っています。

中野　オイスカの考えに共感して活動を支えてくださる方の存在は本当に心強いです。人を育てる教育活動は、国としても本当に大事な柱だと思いますが、それが揺らいでいる面もありますよね。

川合　私たちの世代より上の人たちが、自然に身につけてきた当たり前のこと、例えば手足や頭が動くならば、できることは自分ですることとか、自然や神様に感謝するといったことが、今の子どもたちには受け継がれていないと感じます。学習指導要領が改定されて、今は「生きる力」を身につける教育が現場で求められていて、一方的に〝させよう〟としてきたこれまでの教育を変えることに現場は右往左往していますが、ここで変わらなければ、日本人の本当の精神力の強さや感性の素晴らしさが、忘れ去られたままになってしまいます。だからこそ、先ほど申し上げた、数値化できないような能力や感性を育むことができる木育を推進していきたいと考えています。木育の成果の整合性を問われることもあるのですが、

実際に取り組んでいる学校の先生やお母さんたちへのインタビューから得られた結果が真実です。木育は、素朴な、生きている木を触りながら感性を呼び覚まし、能動的に物事に関わる習慣を小さな時から身につける教育です。学校現場で必須授業にしてもらうことを願いながら活動を続けています。

村上　子どもって、何もないところから何かを作り出す力や本質を感じ取る力を持っていると思います。でも、今の日本においては、そうした「人間の持つ大切な力を守り育てる」ことに対し、あまり意識を持たずに手放してきてしまっているのが現実なのではないでしょうか。私はフィジーをフィールドにしてハーブの研究を行っていますが、その過程では、人の持つ力を確かに感じますし、たくさんの気付きや学びもあります。私はもともと生化学を専門にしていて、その中で漠然と感じていたのは、人間が何もしない方が、生態系はうまく回っていくのではないかということでした。人間は自然の持つ〝律〟に対して余計なことをしているのではないかと。でも、フィジーに行って現地の人たちと関わる中で、「人間って本来はこんなに賢いんだ」と感じることがたくさんあるんです。それは、ハーブをどう使っていくかという日常的なことから、私たちはどう生きていくかという根本的なことも含みます。フィジーでは大人は子どもたちに対して絶対的な責任があることを強く自覚しながら向き合っています。例えば私たちも電気が通っていない、自給自足が基本の離島に行った時には、子どもたちの前ではパソコンは広げないようにしていました。どんなお土産なら渡していいといったことは、近くにいる大人に聞くようにとのアドバイスももらいました。それは全ての大人が子どもの行動や思考について判断して関わる力を持っているということだと思います。親や大人は子どもたちから敬われ、頼りになる存在で、校長先生に至っては、名前を出しただけで子どもたちの背筋がピンとするなんてこともあったりします。

木のおもちゃ（上）と「森のつみ木広場」の様子

大人は子どもたちに絶対的な責任があると自覚して行動している

中野　日本も昔はそうでしたよね。子どもたちが今置かれている状況は、大人たちがつくり出してきたものであり、その責任は大きいですね。

村上　フィジーの子どもたちは、日々、大人にくっついて歩いていて、その中で学んでいます。ハーブに関しても詳しくて、蚊に刺されたらこの草の汁がいいって塗ってくれることもあります。30代の若い人たちとも現地で仕事をしますが、彼らは電気もない、お店もない中で、必要なものはすべて自然の恵みからいただく生活をしてきて、その中で養われている力強さを感じます。きっと、フィジーのような自然の中での生活でなくても、木育活動を通じて木に触れることで、人間的な力強さみたいなものが養われていくのだと感じます。それと、川合さんがおっしゃっている非認知能力や感性ということにつながると思うことなんですが……。大学のプロジェクトで、薬草のインベントリー調査をするのにフィジーに行った時、現地で薬草を扱っている方たちに教えてもらったさまざまなことを本にしました。作ることは作ったのですが、文字にしたときに抜け落ちてしまうことがとても多いことに気づきました。つまり人が相手の体温を感じながら学んでいく事柄の中には、も

のすごく尊いものがあるのに、文章にすると、そういうものが全て落ちてしまう。人や自然との関わりの中や、大人たちについて回って得ていくような繊細な知恵って、本の中ではなく、人のつながりの中にしかないということを感じたんです。そして、フィジーの子どもや若者たちにはそういう知恵が育まれていて、目の前の出来事に対しても、これはこうだからこの結果になったという理屈を考えたり、問題を解決していく能力の強さもあるように感じます。今の日本では、そうした知恵や能力を身につけることが難しい面もあるかもしれませんが、それでも日本の大学生とお話をすると、「こういう考えもあるんだ」と勉強させられる面もあって、若者の力の強さも感じています。

中野　私自身はハーブと言われても何も知らないと思ったのですが、子どもの頃は田舎で育ったので、薬草は身近にありました。あせもができたら桃の葉を使うとか、ゲンノショウコやヨモギなんかも身近な薬草として活用していました。血止めにはこの草、ヨモギはどのように使うとか、子どもの時から自然と身についていました。親は畑仕事で忙しいので、ほったらかしにされている子どもたちは、ちょっとしたケガなら、その辺の草で対処することぐらい自分たちの知恵として備わっていたわけです。今は便利すぎて薬草に目を向けない。薬局で買った薬があるから。本当は自然の中に全部神様が与えてくれているものがあるのに、それをちゃんと利用するという大事なことを私たちは忘れてしまっていますよね。以前、子どもたちを山に連れて行った時、何もないからどう遊んでいいか分からずにいる様子を目にしました。私が子どもの頃は、何もないところから遊びを生み出して、時間が過ぎるのも忘れて遊んでいたように思うのですが。

村上　ある程度ほっとくと遊びが始まると思いますよ。歌ったり、何かを見つけたり。これまでに体験がないから時間がかかるだけだと思いますが、何もないところから遊びを生み出す力は、日本の子どもたちにも備わっているはずです。それを刺激することが大事で、その一つが木育なんですよね、きっと。

中野　森の中に一日ほっぽり出されたら、お腹がすいたと泣くだけなのか、食べられる何かを見つけてくるのかは、大きな違いですね。

村上　しばらく泣かせてみるのも大切ですよね。そして、やがて我を取り戻して何か見つけてくる。それが生きる力になっていくと思います。何もないところから何かを作り出せるということは、生きる力として重要だと感じています。フィジーは、新型コロナウイルスの感染拡大が始まった時、完全にシャットアウトしたんです。外から物が入ってこなければ、当然お店から物がなくなるわけですが、フィジーの人たちは、「政府が自分たちで何とかしろと言ったから」と、みんな次の日には漁をしたり、畑に植えたりしていました。もちろん、日本と比べたら気候的な豊かさもあるけれど、物がないという状況下で強いのは、フィジーの人たちみたいに、作り出す力がある人たちだと感じました。

中野　フィジーは完全に国を封鎖したんですね……。日本じゃあ無理でしょう。

自然にお返しをする作法を持たなければいけない

ハーブを採取するフィジーの女性たち

村上　過去に伝染病で痛い目に遭った経験もあるからだと思います。そして、シャットアウトしても大丈夫だという自信もあるからですよね。彼らの、自然の中でものを作り出しながら生きていく力の強さは、オイスカの森づくりの活動の起点にもつながると思いました。私が「富士山の森づくり」に関わるようになったのも、シラベを使って何か作り出せないかというところから始まっています。シラベだけではなくて、森には植物があって、昆虫がいて、さまざまな命が一緒に存在している。その舞台を見せてもらえるのがとても嬉しかったし、ここならいいものが作り出せると感じました。そして、森から自然の恵みを受け取りながら物を作り、私たち人間が生かされているのだから、私たちは自然にお返しをする作法を持たなければいけないという考えがオイスカにはあるのだと思いました。自然療法

をする時にも同じ考え方を持っているので、そうした点でも、私の活動とオイスカはつながっているのだと感じて心強く思っています。

川合　先ほど村上さんが言葉にすると抜け落ちていくもののお話をされましたが、それが第六感なのか、数値化できない力や感覚なのか分からない、目には見えないエネルギーだけれど、確かに存在する、影響のあるものとして意識することが大事だと思っています。

村上　またフィジーの話ですが、フィジー語では、煮炊きに使う薪を取りに行く日というのが曜日の名前になっていたり、曜日感覚も生活に密着しています。電気やガスがない、離れ島で若者と蒸留をすると、みんな、かまどに入れた火のコントロールがうまい！　私にはとてもできません。私だって子どもの頃、自宅のお風呂は薪で沸かしていたので火加減の調整はできるはずなのにできないのは、誰かがやってくれてたのかなぁ？

中野　私は自分でやっていましたよ。途中で薪から石炭に変わりましたけど。

村上　自分でやって、しっかりと血肉にすることが大事ですよね。さらにはちゃんと次の世代につながっていくことで、人の生きる力が強くなっていくのだと思います。祖母ができたこと、やっていたことが母の世代になったら、できることがかなり減って、そこから私の世代でさらに減って、これが加速していく……困ったことです。

川合　その火の加減も同じで、言葉で教えられるものではないですよね。言語化できないことをどう教えるのかという教育の限界を突破するには、実体験しかないと思っていて、それはフィジーの人たちが何が上手で、どう賢いかというところにヒントがあるような気がしました。

村上　フィジーの人たちの賢さは、基本的な自然の摂理みたいなものを本質的にしっかり捉えている点にあると思っています。その中にはシンパシーを持つということもあって、植物と私、人と人との間のシンパシーみたいなもの。地球上に物として存在するものには、動いているという性質が原子のレベルからあって、2つの原子の間には引き合う作用と離れる作用があって、その対極的なものがバランスをとっているという摂理を、日頃の生活の中で本質的に理解しているように感じます。自分の体験から今、目の前や遠く離れたところで起きていることに対するシンパシーや、それまで知らなかったことに対するイマジネーションを育てることって大事なことだと思うんです。人間は生物的には、霊長類の一番進化したところにいて、進化の只中に存在するものは試行錯誤をしながら、もしかしたら滅びるかもしれないけど、でも本来は

やまなし水源地ブランド推進協議会と「みずともり mizutomori」のこと

やまなし水源地ブランド推進協議会

オイスカが山梨県をフィールドに、自治体や企業との協働で行ってきた取り組みを通し、2012年に発足しました。12の産・官・民の参画メンバー（オブザーバー含む）で活動し、オイスカ山梨県支部が運営事務局を務めています。

参画メンバーの早川町、丹波山村、道志村では、都市部の水源林となる森を育んでいますが、その整備や間伐材の利活用をはじめとする森林資源を活用した産業の振興といった面で、課題を抱えています。さまざまなステークホルダーと連携して課題解決に取り組み、地域活性化の新たなモデルづくりを目指しています。

また、水と森によって育まれてきた地域の自然や文化を守り、活かしていくことを目的に立ち上げられたのが「みずともり mizutomori」プロジェクトです。早川町ではスギを、丹波山村ではヒノキを活用したアロマ除菌剤やエッセンシャルオイル（精油）を「みずともり mizutomori」シリーズとして商品化するほか、自然と人との関係や作法を学ぶための環境教育なども展開しています。

左／山梨県内のヒノキやスギなどを活用したアロマ除菌剤（上）と精油
右／精油づくりなどのワークショップでは、参加者が森に入って材料を確保する体験も

反応しながら選択をして進化していくものです。自然の摂理の中で、人間社会も自然の中の一部だとすると、それがどう組み上がって生き物として進化するのかということが試されているような気がしています。

川合　シンパシーは、私も日々意識しています。コンサルティングで関わる企業や保育園でも組織の中でシンパシーを生むことが求められることがあり、〝計画された偶発性〟と言いますか、その場その場でいろいろ考えて動くので、直感型コンサルティングなどと言われています。組織はシンパシーの調和や逆に人への反発心で構成されていて、でもなかなかそれを言語化して伝えることが難しい。組織というのは常に移り変わっていて、そこにいる人が内側から変わり、やる気を出すには、よい風土の中で影響し合うことが大切で、それらは、本当は見えないものだからこそ、効果があるのかもしれませんね。村上さんは、シンパシーを日本語にすると、一番近い言葉って何だと思いますか？

村上　日本語で……同情って訳すことがあるけど、そうじゃないですよね。漢字で見ると合っているけれど、実際の日本語の意味とは違いますよね。生物学的な言葉で言うと、共振とか共鳴現象みたいなものに近いかもしれません。

川合　共振共鳴……みたいな感じですかね。

村上　そういう力が強いと、相手のことを知ろうと思ったり、喧嘩でも何でもいいから相手と交わろうという気持ちが働くことに通じるのかなぁと思います。

川合　まさに親子関係、母親と子どものつながりも同じだと思います。だから、母親の心持ちは、シンパシーで伝わるので、母親自身が心地よく過ごすことが大事だと、いつもお話ししているんです。それと、調和の中身って何だろうということも考えます。シンパシーみたいな、言葉にするのが難しい目に見えないたくさんのものが、人種が違っても調和し合うことで世界平和につながるのかなぁと。私自身は人材育成の分野で、人と人とのつながりの中のシンパシーという点で、村上さんがおっしゃることにとても共感できます。また、先ほどお話にあった自然と人とのシンパシーについては、オイスカの活動の中で伝えようとしている「自然に対する礼節を持つ」ということに通じることなのかなぁと感じました。「人を敬う」ことと同じように「自然も敬う」ことが大事だということは、「木育ひろば」の中でも、体験で感じることはできると思いますが、それを子どもたちに分かりやすく伝えるため、ストーリー調で話をしたり、実際のリアルな写真や紙芝居を使ったり、ちょっとした言葉掛けの工夫をするなど、チームで案を生み出しています。

「人を敬う」ことと同じように「自然も敬う」

村上　地球を舞台にして生きている私たちは、人と人、人と森といったいろいろなつながりがあり、自然から何かの恵みをいただくなら、しっかりと感謝の気持ちをお返ししていくのが本来の作法です。でも、直接その人やそのものにお返しするだけではなくて、ぐるっと巡ってお返ししていく方法もありだと思っています。例えば、子どもが親に返すのではなくて、次の世代に引き継いでいく。バトンを渡していくような感謝の巡らせ方もあるということも大事なことです。多分、オイスカが広げようとしている有機農業も同じだと思うんですが、自然の恵みを使わせてもらう時って、無理なく無駄なく、といったことを考えます。フィジーはヤシの木の恵みを余すことなく使っていて、実だって中のジュースを飲んだら、そのままぽ～んと放ってしまうんですが、よく見るとその近くには新しい芽が出てきているようなこともあって、しっかり巡っている。恵みをどうやって無理なくいただくのか、そこにある命を、尊いものとしてどう活かし切るかを考える時、そのものの命が輝くように使うことを、フィジーの人たちは考えているように思います。

中野　地球からいただいたも

ら、作っていかなければならないと思います。日本も古来から自然のリズムを重要視しながら生活をしてきていて、本当はそういう中にこそ健やかさがあったはずです。

中野　私たちは進歩しているのか、退化しているのか分からないですね。昔、お百姓さんから聞いた話に感激したことがありました。種を三粒蒔くというのですが、一粒は大地のため、一粒は虫のため、最後の一粒が自分のためだというのです。ここに住まわせてもらって農業ができることに対する感謝と畏敬の念なんですね。それから、食事でもおやつでも「いただきます」という感謝は、自然への感謝であり、自然にお天道様に手を合わせる文化が日本にはありました。私たちが口にするものは、すべてが自然からいただいたものです。もちろん人間が手を加えたかもしれないけれど、「いただきます」の感謝は、人間ではなくお天道様に向けられていました。でも農業のあり方もすべて変わってしまっていて、効率を求めた結果、命の根だった稲を育てていたはずが、今ではただの食べ物として育てている状況があると嘆くご年配の方にお会いしたことがあります。大型機械で稲刈りをする時、田んぼの隅は手で刈り取らなければならないのですが、それをしないで、後から全部土にすきこんでしまうのを見て涙が出たと話してくれました。作る人の心がそうだと、食べる人も同じようになってしまうのではないかと思います。真心を込めて作ったらお米が輝いてくるけれど、合理的に一つのものとして作ったお米はちょっと違う。日本のお米の文化が消えて、自然に感謝する心も失ってしまうのは、子どもたちにも申し訳ないように思います。これも自然を敬う心、自然への礼節を大切にしてこなかった大人たちの責任ですね。子どもの心を育むさまざまな活動の中でオイスカもさらに意識をして伝えていく必要がありそうです。

自然にお天道様に手を合わせる文化が日本にはある

村上　先ほどもお話しした、何もないところから何かを作り出せるということは、生きる力につながって、自信を持った大人になれると思うんです。オイスカの活動の中で、森に入ってさまざまな体験をするリトリートなども行っていますが、そういう経験の中で、作ることとイメージすること、創造と想像が合わさって文化ができ上っていくことを、子どもたちにも伝えていきたいと思っています。

川合　木育プロジェクトを通して、またオイスカと共に日本と世界の次世代の子どもたちが「地球に生まれてよかった」と思える活動を続け、使命を全うしてまいります。

中野　今日はどうもありがとうございました。今年もさまざまな現場での活躍に期待しています。

のは無駄なく使って、全部お返ししていく。村上さんがおっしゃったことはまさに日本にもかつてはあったことです。日常の生活の中にある素材は、全部自然に還るものでしたしね。だからごみ問題なんかも起きなかった。

村上　フィジーの離れ島でビニールのごみをヤシの実と同じように放ってしまう光景を見たことがあります。でも考えてみれば最近まで、自然に還るものしかなかった訳ですから、放ってしまえばよかったのが、急にビニールのような自然に還らない素材が生活の中に入り込んできたということなのです。新しいものは元々ある生活文化みたいなものをしっかりと大切にしなが